

5.3 品詞と句

以下のような観点から、語を分類するものとして、名詞 (noun)、形容詞 (adjective)、動詞 (verb)、副詞 (adverb) のような品詞が定められる。

1. 単語が意味にどのように寄与するか
2. 文の構成にどのように寄与するか

さらに、形容詞や形容動詞や動詞などの場合、上記以外に活用の規則性という点から区別されていることにも注意してほしい。

ここで「文の構成」を考えた場合、いくつかの語がまとまってある構成素 (constituent) をなす、と考えると都合がよいことが多い。その根拠としては以下のようなものがある。

1. 単一の語によって置き換え可能である (「意味が変わるかもしれないが、置き換えてもまだ文を構成する」という意味で置き換え可能)
2. 語順を変更する場合に、移動する単位となる
3. 質問やそれに対する答えの場合に省略される単位となる

いくつかの語から成り、文を構成する要素を句 (phrase) と呼ぶ。句が他の語や句とまとまってより大きな句を構成して行き、最終的に文を構成すると考える (注: 「構造」の概念)。

ここで、句 (たとえば「耳の大きな犬」) は、それより小さな句 (「耳の大きな」) や語 (「犬」) とから構成されているが、それぞれが対等の立場であるというより、どれかが (品詞の意味で) 中心的な役割を果たしており、他のものが補足的、もしくは修飾的に付いている、と考えた方がよいことが多い。そこで句の中での構成素の役割を、以下のように分類して考えよう— これは、句を構成する語の品詞によらず、どの句においても必ず主辞は一つ存在すると考える。

- **主辞 (head):** それぞれの句において、それがどのように文の構成に寄与するかを決定する (品詞の意味において) 中心的な要素。句の品詞的な性質を決定するもの。

例えば「耳の大きな犬」という句は「耳の大きな」と「犬」から構成されていると考えられる。その場合、「犬」が中心的な要素であるので、これが主辞となる。また「耳の」という句は「耳」と「の」という語から構成されているが、全体として名詞を修飾する連体句として働くので、「の」が主辞と考えられる。

このように、日本語では主辞は常に句の最後の構成要素である。

- **補語 (complement):** 主辞の意味を補うために必要な句の構成要素。

例えば「健が行く」という句は「健が」と「行く」から構成され、「行く」が主辞である。しかし「行く」だけでは意味的に完結しないので「健が」がそれを補っている、と考えられる。したがって「健が」は主辞「行く」に対する補語として働いている。

- **修飾語 (adjunct)**: 補語の意味では主辞の意味を補うものではなく、修飾的に働く句の構成要素。

例えば「ゆっくり行く」という句は、「ゆっくり」と「行く」から構成され、「行く」が主辞である。そして「ゆっくり」は、「行く」の様子を描写する修飾的な働きをしている。そこで「ゆっくり」は主辞「行く」に対して修飾語として働いていると考えられる。

(10) 句の例 (括弧内はそれぞれ句と考えられる)

名詞句	(あの (大きな 犬))
(noun phrase)	(あの (大きな ((犬 の) 首輪)))
動詞句	((犬 を) 見た)
(verb phrase)	((道 で) ((あの (大きな 犬)) を 見た))
副詞句	とても ゆっくり
(adverbial phrase)	(((((カタツムリ の) よう) に) (とても ゆっくり))

問題 8: 上の例において、それぞれの句を構成している要素 (たとえば、名詞句の例では、「あの」「大きな」「犬」) それぞれは、主辞、補語、修飾語のどの役割を果たしているか、答えよ。

5.3.1 句の構造の表現方法

例: 「公園の木」

これは「公園」「の」「木」という4つの単語が単に並んでいるのではなく、前節で見たように、「公園の」という助詞句(役割としては連体修飾)があり、「木」と結び付いて「公園の木」という名詞句を構成すると考えられる。ここで、助詞句「公園の」においては「の」が主辞、名詞句「公園の木」において、「木」が主辞である。

この関係を以下のように括弧を用いて表すことにする。(以下では、括弧の対応関係を明らかにするため、括弧に下添字をつけて表わしている)

(11) 名詞句 (₁ 連体句 (₂ 名詞 (₃ 公園)₃, 連体助詞 (₄ の)₄)₂, 名詞 (₅ 木)₅)₁

ここで、句全体だけではなく、句を構成している要素が

『品詞／句の名称』(句を構成している要素, ...)

という形で表されていることに注意しよう。

今見たように、単語が句を構成するだけではなく、句や単語からまた句が構成されるという階層構造¹¹を考えることができる。この階層構造という捉え方が、文の構造ひいては文の意味を考える時に重要である。

¹¹ 「階層構造」は、自然言語理論だけではなく、いろいろな科学の分野ででてくるキーワード。

5.3.2 「曖昧さ」と句の構造を用いた曖昧さの表現

(12) 「大きな公園の木」

この文字の列には少なくとも二つの解釈が存在する。その違いは、次のように句の階層構造を示すことで明らかにできる。

(13) a. 名詞句 (₁ 連体句 (₂ 名詞句 (₃ 連体詞 (₄ 大きな)₄, 名詞 (₅ 公園)₅)₃, 連体助詞 (₆ の)₆)₂, 名詞 (₇ 木)₇)₁

b. 名詞句 (₁ 連体詞 (₂ 大きな)₂, 名詞句 (₃ 連体句 (₄ 名詞 (₅ 公園)₅, 連体助詞 (₆ の)₆)₄, 名詞 (₇ 木)₇)₃)₁

この例のように、複数の解釈が存在する事を、曖昧さ (あいまいさ, ambiguity) が存在する、という。

ここで取り上げた曖昧さは「構造の曖昧さ」と呼ばれるもので、文や句がどのような構成素から成り立っているか、それらがどのように結びついているかを、図示したり括弧表記することで明示することにより、その文や句がどのように曖昧かを示す事ができる。

この例の場合は、「大きな公園」が「木」と結びついているのか、「大きな」と「公園の木」が結びついているのか、ということで、二通りの曖昧さを説明できた。

「構造の曖昧さ」以外の曖昧さには、語彙の曖昧さ (例: イシ—意志、石、医師、遺志など)、文脈上の解釈の曖昧さ (例: 「時計を持っていますか?」: 単なる質問か、時間を知りたいのか) などがある。

5.3.3 木構造による句の構造の表現

階層構造を示す方法として、今まで見たように括弧を使う方法以外に、(グラフ理論でいう) 木構造を用いる方法が良く用いられる。

(7) に対応する木構造は、図 5.1 のように書く事ができる。これが (7) にどのように対応しているのかを考えてみて欲しい。

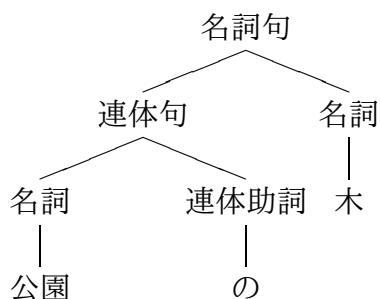


図 5.1. 「公園の木」の構造を表す木

グラフ理論における木構造についての用語の復習:

- 木とは、以下の条件を満たす有向グラフである。
 1. 「入る」枝が存在しない根 (root) と呼ばれるノードが唯一存在する。
 2. 根以外のそれぞれのノードに入る枝はただ一つである。
 3. 各ノードには、根からそれに至る道 (パス) が存在する。
- ラベル付きノード (labeled node): ここで用いる木のノードにはそれぞれラベル (上の例では、「名詞句」など) がつけられている。
- 枝 (edge) もしくはリンク (link): ノードとノードを結ぶもの。すべての枝に向きがつけられているグラフを有向グラフという。
- 根 (root node): 木にはただ一つ存在する。木を図示する場合、根を上にして書くことが多い。
- 葉 (leaf): 「出て行く」枝を持たないノード。
- 親ノード (parent node) と子ノード (child node): 枝によって結ばれた二つのノードにおいて、そのノードから枝が「出る」場合が親ノード、「入る」場合が子ノード。木を図示する場合は、上にある方が親、下の方が子であるのが普通。
- 先祖ノード (ancestor node): 任意の二つのノード v 、 w において、 v から w に至る道 (パス) が存在するならば、 v は w の先祖。 $v = w$ の場合もある。

課題 9

1. 以下のそれぞれの句に対し、句の構造を図 5.1 にならって構文木の形で表せ。(注意: これらの句の持つ曖昧さに注意せよ。何通りかに構成素をわけられる場合には、それらすべてを表し、それぞれがどのように違った意味になるかを書け。)
 - a. 黒い髪のきれいな少女
 - b. 忘れられた日記の秘密
2. 今の問題を参考にして、構文的に曖昧な文 (二通り以上の構成に分けられ、それぞれが有意味な文) を作り、その文に対して可能な構造をすべて表せ。

5.4 文節と句の違い

国文法では、文の構造を以下のようなレベルに分けて考える。

- 語—それぞれ「品詞」という同じような文法的な性質を持つ語のグループに分けられる。

国文法では品詞を二分類、すなわち、名詞や形容詞などの自立語と、助詞や助動詞などの付属語に分けて考えている。

- 文節: 一つの自立語と、それに続くいくつかの付属語(なくてもよい)からなる。

「文節」や「自立語／付属語」の区別は、音韻的な観点から日本語の文の構造を記述するために考えられた物であり、意味や文法的な観点から考えられたものではない。また英語など膠着語以外の言語に当てはめることが困難な概念である。

本講義では、「文節、自立語、付属語」という概念は使わず、語よりも大きな文を構成する単位として「句」を用いる。